

春の一日 (1997年作曲 日本音楽集団委嘱)

「長澤さんはほんとうに自分が、いいたいことを表しきった」

小宮多美江 (音楽評論家)



長澤さんを知ったのはいつのことか思い出せないほど昔だが、私の師、吉田隆子(1910-1956)が戦前の人形劇団ブークの音楽を担当、戦後同じ役を長澤さんが担ったのだからなんらかのつながりが出来て当然だ。

今回演奏される「春の一日」は、同じ四季の題のさいごの曲だそうだが、その最初の「冬の日」のパート1にあたるピアノのための「冬の日」は長澤さんが愛娘のために作った曲で、私はそれを1971年、音楽の世界社から出版している。白い雪の舞うなかに赤い帽子と手袋があざやかな装幀は、山の友人熊谷榎さんの作だ。

時代は飛んで90年代、私はクリティーク80編著で作曲家列伝、現代日本の作曲家シリーズを出しはじめ、その2『吉田隆子』を川尻泰司さんに差し上げたとき、著書サインを求められ、生まれてはじめて、たどたどしくサインしたおぼえがある。

川尻さんが私の家に訪ねて来られたのはそのすぐあとだったろうか。もちろん吉田隆子伝を書くには、目白あたりの喫茶店でオネゲルの「パシフィック231」を聴いたときのお話などをうかがっていたけれど、そのときは多分必要があって川尻さんの方からおいでになったのだと思う。

ところが川尻さんは本題に入るよりも前に、「ぜひあなたに言っておきたいことがある」といって、長澤さんのことを話しはじめられたのである。

話とは、ブークが戦後復活してまもなく「セロ弾きのゴーシュ」の公演があり、テーマはベートーベンの「田園」、チェロがベテランの井上頼豊だったほかは、当時のことだから編成は推して知るべし。しかし公演はたいへん好評を得た。

そこで、人形劇映画が作られることになった。長澤さんは当然、その音楽を担当する気でいた。映画

となれば、ありあわせの楽器だけではなく本格的な楽器編成で書ける。

ところが脚本の田中澄江に、音楽は長澤さんではだめだ、ほかの作曲家でなければ、と条件をつけられたというのである。(映画は三井芸術プロ1953年、音楽は伊福部昭)

それをきいた長澤さんはたいへんなショックを受け、川尻さんの目の前で地団駄踏んでくやしがったという。

かれが清瀬保二に作曲を師事することになったのは、それからだということである。

長澤さんの温和な性格については多くのひとびとが認めるところだろう。私もそのひとりで、だからこそ、そのときの口惜しがり方が尋常でなかったらしいことはよくわかった。

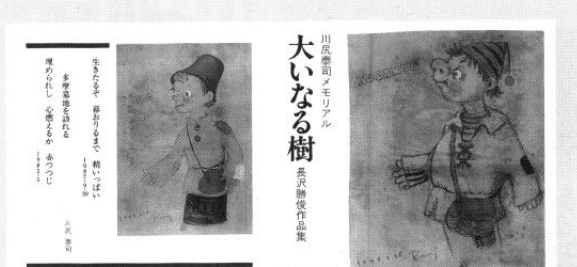
長澤さんはそれから忙しい活動の合間を縫って砧に通った。そして清瀬保二からなにを学んだか。

それは、作曲の技術ではない。そうではなくて本当に自分のいいたいことを表しきることこそが作曲だということ。そしてそれを貫くのはじつはとても勇気の要ることなのだということではないか。

日本音楽集団の発足にあたって清瀬保二が贈ったことば、邦楽を現代化するという問題はけっして簡単なことではない。長いながい模索の時間を覚悟してとりかからなければならない。なによりも多くの作曲家、演奏家の協力が必要だ、というその言葉を、長澤さんは創作の生涯を通じてりっぱに生かした。自分ひとりでなく多くの協同の成果として、おそらく師もおどろくほどゆたかな作品をのこしたと思う。

いま、ピアノのための組曲「冬の日」を弾いてみると、そこには師清瀬保二と共通する単純の美と、そして愉しさの源のリズムがある。

日本楽器による「春の一日」にもふんだんにあるその特長をこれから楽しみたいと思う。



CD 川尻泰司メモリアル「大いなる樹」リーフレット



「春の一日」収録CD 「冬の日・パート2」収録CD



日本音楽集団「創立団員らが集う〜40周年記念コンサートより(2004年11月26日)」